

日本語教育における教師の指導方法及び学習者の反応
—新出文法項目の導入方法を中心に—^(*)

Lina Abdelhameed Ibrahim Ali
Faculty of Arts -Cairo University

في هذه الدراسة ، قدم المؤلف أمثلة على الدمج الفعلي للتعليم على الطريقة اليابانية في التعليم العالي في مصر (برنامج الترجمة التخصصية للغة اليابانية بجامعة القاهرة) ، وناقش البحث المزايا والصعاب في هذه التجربة ، بالإضافة إلى كيفية تطور الطلاب نتيجة لتلك التجربة. حصل المؤلف على درجة الدكتوراه في اليابان ، و تلقى تعليمًا على الطريقة اليابانية وأدرك أهمية التعليم النشط ، لذلك حاول الاستفادة من التعليم على الطريقة اليابانية في مجال تعليم اللغة اليابانية لطلاب الجامعة المصريين. قدم الباحث نموذجًا تعليميًا عمليًا لتطوير القدرات الهامة من خلال التعلم النشط يحتوي على أنشطة عملية تعزز التعاون والاستقلالية والقدرة على الحكم و اتخاذ القرار والقدرة على الاتصال مع الآخرين وحل المشكلات. نتيجة لذلك ، ثبت أن أنشطة الفصل الدراسي التي تعتمد على التعلم النشط في التعليم على الطريقة اليابانية مهمة جدًا وفعالة للطلاب لفهم مزاياهم الخاصة وتطوير شخصيتهم ليصبحوا أفراد نافعين في المجتمع.

في هذه الدراسة ، قدم المؤلف أمثلة على الدمج الفعلي للتعليم على الطريقة اليابانية في التعليم العالي في مصر (برنامج الترجمة التخصصية للغة اليابانية بجامعة القاهرة) ، وناقش البحث المزايا والصعاب في هذه التجربة ، بالإضافة إلى كيفية تطور الطلاب نتيجة لتلك التجربة. حصل المؤلف على درجة الدكتوراه في اليابان ، و تلقى تعليمًا على الطريقة اليابانية وأدرك أهمية التعليم النشط ، لذلك حاول الاستفادة من التعليم على الطريقة اليابانية في مجال تعليم اللغة

الكلمات المفتاحية : التعليم المستدام ، التعلم النشط ، الأنشطة العملية ، التقييم الذاتي ، تقييم الآخرين

Abstract:

In this study, the author provides examples of the actual integration of Japanese-style education in higher education in Egypt (Specialized Japanese Language Translation Program at Cairo University), and the research discusses the advantages and difficulties of this experience, as well as how students develop as a result of this experience. The author obtained a doctorate degree in Japan, received Japanese-style education and realized the importance of active education, so he tried to benefit from Japanese-style education in the field of teaching Japanese to Egyptian university students. The researcher presented a practical educational model for developing important abilities through active learning that contains practical activities that enhance cooperation, independence, the ability to govern and make decisions, and the ability to communicate with others and solve problems. As a result, classroom activities based on active learning in Japanese-style education have proven to be very important and effective for students to understand their own qualities and develop their personality to become useful members of society.

In this study, the author provides examples of the actual integration of Japanese-style education in higher education in Egypt (Specialized Japanese Language Translation Program at Cairo University), and the research discusses the advantages and difficulties of this experience, as well as how students develop as a result of this experience. The author obtained a doctorate degree in Japan, received Japanese-style education and realized the importance of active education, so he tried to benefit from Japanese-style education in the field of language teaching.

Keywords: sustainable education, active learning, practical activities, self-evaluation, evaluation of others

要旨

本研究では、日本式教育をエジプトの高等教育（カイロ大学日本語専門翻訳専攻）に実際に取り入れた事例を紹介しながら、その問題点や課題、そしてその試みの成果である学生の成長などについて報告する。筆者は日本で博士号を取得したが、日本式教育を受け、その素晴らしさを実感したため、エジプト人日本語学習者の日本語教育の現場で日本式教育を活かすことを試みた。特に、協調性、自立性、物事の判断力・決断力、コミュニケーション力、課題解決力などの能力を育成するために、実践的な教育モデルを提供した。その結果、日本式教育におけるアクティブ・ラーニング型による教室活動が学生にとって非常に重要であり、学生が自分自身のメリットを分かるのに効果的であることを証明できた。

キーワード：持続可能な教育、アクティブ・ラーニング、実践活動、自己評価、他者評価

1. はじめに

国の発展や、豊かな暮らしに最も基礎となるものは教育だと考えられる。そのために、教育の質の向上を目指さなければいけない。教育の質を向上することにより、国の経済発展、豊かな社会、環境保全、持続可能な開発が実現できると思われる。従って、近年では世界中でよく耳にする持続可能な開発目標 SDGs の 17 の目標の 4 番目の「質の高い教育をみんなに」（

Quality Education) という目標が一番重要なのではないかと考えられる。

質の高い教育を国民の皆に平等に提供することが重要ではあるが、この質の高い教育とはいったいどのような教育なのだろうか、どのように実現できるものなのだろうかという疑問を解くことが本研究の出発点であった。筆者が教育を改善するにはアクティブ・ラーニングといった実践活動を取り入れることが必要不可欠なことだと考えられる。

2. アクティブ・ラーニングとは

本研究で扱うアクティブ・ラーニングとは、思考力を活性化する教育方法であり、教師が一方向的に指導し、学習者が受け身になってしまうのではなく、学習者自身で課題を考え、お互いに話し合うグループディスカッションやグループ活動を増やすことにより、学習者が授業により積極的に参加する授業を行うことを指す(以下、日本式教育とする)。本研究では、アクティブ・ラーニングをエジプトの高等教育(カイロ大学日本語専門翻訳専攻)に実際に取り入れた事例を紹介しながら、その問題点や課題、そしてその試みの成果である学生の成長などについて報告する。

3. 本研究の意義

本研究を行うにあたり、日本式教育を完全に高等教育に取り入れるわけではないが、カイロ大学の学生に日本式教育の中から最も重要と考えられる活動を取り入れることにした。具体的に、以下の3点を目標に、協調性、自立性、物事の判断力・決断力、コミュニケ

ーション力、課題解決力などの能力が育つための活動に焦点を当てて、教育モデルを作成した。

- エジプトの将来を描くことができる優秀な人材を育成すること。
- 様々な分野におけるエジプトの課題解決に前向きで積極的に貢献できる人材を育成すること。
- エジプト・日本二カ国間の友好関係を深めることに貢献できる人材を育成すること。

4. 研究背景と目的

筆者は、2010年～2016年にかけて筑波大学国際日本研究専攻、教育領域で修士号と博士号を取得した。実践的活動が主だったため、最初は非常に苦勞した。筆者はエジプトで、積み上げ方式や、丸暗記が中心の教育を受けてきたが、丸暗記の能力で論文を書いたり、大勢の人の前で発表したり、そして発表自体を作成し、自分の考えを分かりやすく伝達するような活動には役立たないことを実感した。また、グループワークやチームワークで何かの課題を成し遂げることも多くのエジプト人のように慣れていなかったという問題もあった。日本に留学した期間で、研究者としてでなく、社会人として自分にどのような能力が必要なのかということを考えるきっかけとなった。さらに、修士号や博士号を取得した後に、エジプト人の日本語学習者の日本語教育の現場でどのような課題に直面するのか、どのようにして自分が受けて来た教育とは違う教育を与えることができるか、教師としての役割は何なのかということを知る機会となった。疑問が多い中で、

常に日本で学んだことを母国にも持ち込んで、高等教育に日本式教育を取り入れたい気持ちが強かった。日本で過ごしたこの期間内でアクティブ・ラーニングによる授業を多く履修することによって、グループワークやグループディスカッション、学習者主導型の教育の重要性を実感できた。丸暗記中心や教師主導型の教育から、急に日本の大学院の授業では発表や共同活動、レポート、論文の執筆、ゼミへの積極的な参加など思考力や協調性、創造性、オリジナリティなどと言った能力が求められる教育方式に変わったことは筆者を大いに悩ませたが、筆者はこれらの素晴らしい能力を育てる日本の教育方法に非常に感動した。もっとも、全ての日本の大学で同じような教育方法が使用されているわけではないが、本研究では日本式教育とは、筆者が日本の筑波大学で受けたアクティブ・ラーニングのことを指す。

筆者が博士号を取得して 2016 年に母国に帰ってから、日本で学んだ知識をエジプトの高等教育で活かしたい、教育改善に貢献したい気持ちが強かった。

当時現エジプト大統領が大統領になって初めて日本を訪れた際に日本の教育方式に感銘を受け、エジプトの義務教育改善を目的とした「特活」と呼ばれる巨大プロジェクトを 2016 年に正式に日本政府との協力で立ち上げた。日本式と呼ばれる特活プロジェクトでは幼児教育、初等・中等教育が対象とされている。それ以来エジプト政府が教育改革の取り組みを次々と実施している。特活とは、特別活動の略で、日本式教育の中で様々な活動が公教育に導入された。例えば、清掃、学級会、当番制、日直など協調性や自立性を養うた

めの活動が導入された。プロジェクトが始まった時、既に高校を卒業した学生には日本式教育を受ける機会がなかったが、大学生にも社会で生きて行く上でこれらの能力が必要不可欠なものと考えられる。

2018年にカイロ大学文学部では専門翻訳専攻が新しく設立され、日本語専門翻訳専攻長として、学問キャリアとして新しい段階を始めることになった。そこで、新入生向けに日本で学んだ知識を活かして、ディスカッションやグループによる協同活動に焦点を当てた教育方法によって授業を行うことにした。言い換えると、筆者が日本で受けてきた日本式教育を導入する良いきっかけとなった。いわゆる教師主導型の教育方法ではなく、学習者主導型学習、及び教師によるカウンセラーの役割を活かす活動を次第に取り入れ始めたわけである。

● 日本語専門翻訳専攻の概要

CHP (Credit Hour Program. Specialized Translation) が教育のシステムを向上する目的で 2018年に設立された。市場のニーズに答える教育を行い、国の発展につながる役職に付くことができる人材を育成することが主な目的である。専攻には、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語などがある。筆者が 2017年に日本語専門翻訳専攻を創設した。日本語翻訳専攻の学生数は、2018年に入学した第一期生が 57名だったが、年々入学者の数が増加傾向にあり、設立2年目からの応募者が3倍に増加した。

5. 先行研究

井田（2018）は「アクティブ・ラーニング」は、教授法・学習法の総称として用いられていると述べている。

また、山地（2014）は「アクティブ・ラーニング」は、「実際にやってみて考える、意見を出し合って考える、分かりやすく情報をまとめ直す、応用問題を解く、などいろいろな活動を介してより深く分かるようになることや、よりうまくできるようになることを目指すもの」と指摘している。

河井（2019）は「近年の教育改革ではアクティブ・ラーニング及び主体的・対話的で深い学びが重要とされている」と指摘し、溝上（2016）が提示したアクティブ・ラーニング型授業の位置づけと類型を一部改変して、以下のように分けている。

表1. アクティブ・ラーニング型授業の位置づけと類型（溝上 2016）

①講義型：	教師から学生への一方的な知識伝達型授業・教師主導型
②講義中心型	話す・発表するといった活動はないが、コメントシート等を用いた教師-学生の双方向性を組み込んだ講義中心の授業・教師主導
③講義+AL型	どちらかと言えば教師主導型であるが、講義だけでなく、学生の書く・話す・発表する等の活動も組み込んだ授業。
④AL中心型	徹底的に学習パラダイムに基づいた学生主導の授業。

上記の表から分かるように、①と②は教師主導型であるため、インプットが重視されていると言える。つまり、学生は受動的な存在になって、教師が一方的に知識を伝達するといった教育方式である。このような教育方法が多くの教育機関で使用されるものだと思う。学生自身が能動的に動くことなく楽に知識を正確に受け取ることは保証されていると言えるが、アウトプットが全くなく、学生は積極的に授業に参加しないというデメリットがあると考えられる。また、教師主導型の教育方法では、学生が教師から受けた知識は定着しないという現象も起こることは当然である。一方、③は完全に教師主導型ではなく、インプットとアウトプットも重視される教育方式である。つまり、教師も学生も授業に積極的に参加し、学生は常に受動的な存在ではなく、能動的な存在になることもあると言えよう。④は完全にアクティブ・ラーニングを重視した教育方式であり、学習者主導型であるとも言える。

本研究で紹介する事例は上記④の AL 中心型に当たるものである。しかし、全ての授業で AL 中心型を取り入れたわけではないが、特定の科目を選定し、AL 中心型を取り入れた経験について報告したい。全ての授業で AL 中心型を取り入れられるわけではないが、学生が自分自身で調べた知識や努力を重ね理解しようとする知識、また話し合いやグループディスカッションなどにより獲得した知識は長期記憶として蓄えられるものだと考えられる。これに対して、教師が一方的に学生に与えた知識は、学生が丸暗記しない限り、すぐに忘れられ身につかないのではないかと思われる。従って、完全に全ての授業では④の AL 中心型のみを

取り入れることが難しくても、③の講義+AL型を取り入れることも望ましい。また、③の講義+AL型が④のAL中心型の導入の事前準備の段階であると見なしていいのではないかと考えられる。

6. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実施上の課題

- 学生が経験してきた授業の流れと違った流れで授業を行うことが難しいのではないか。
- 高校を出た若い大学生が、協同活動を受け入れてくれるか。
- 学生が協同活動の意義を分かってくれるのか。
- 協同活動が苦手、慣れて来ていない学生への対応をどうするか。
- 学生たちが、目標達成に向かって適切にディスカッションできるか。

上記のような疑問点や不安などがあった。それでも、日本で共同活動や実践方法による授業の新しい面白さを味わってきて、実践方法による教育は、学生にとって非常に効果のある教育方法で、最上のものだと実感してきた筆者は、実践だからこそ実際にやってみないとわからないと思って、思い切って戸惑わずに新入生向けに、実践方法による授業の計画を積極的に立てて実施した。

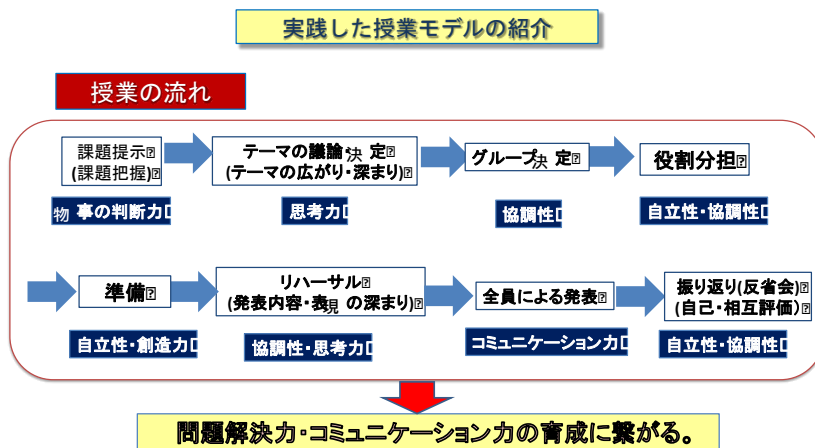
7. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の流れ

本稿で扱う授業内容は、筆者が担当している科目のうち「日本文化・社会」「日本人の心」に関わる科目である。そこで、エジプト人の日本語学習者が日本人

と良好な人間関係を築き、円滑的なコミュニケーションができるように、博士論文の成果を活かして日本語そのものの言語としてのみではなく、言語の背景にある日本文化と日本社会、価値観などのテーマを扱う。

しかし、教師が一方向的に知識を与えるのではなく、自立学習やアクティブ・ラーニング、授業への学生の積極的な参加を目指し、定期的に授業の進め方を工夫している。

授業の流れについて、以下で具体的に述べる。まずは、筆者が作成したアクティブ・ラーニングモデル（リナ教育モデル）を提示する。



リナ教育モデル（2018）

本稿の冒頭で述べたとおり、筆者が紹介するアクティブ・ラーニング教育モデルは、筆者が日本で獲得した知識に加え、自ら考えた活動の組み合わせである。エジプト人大学生に社会で生きていく上で重要な様々な能力を養ってほしいという思いから、上記で提示した八つの段階からなるモデルを導入した。第1段階か

ら第3段階までは、授業内で行う活動だが、第4段階から第6段階まで学生が1週間から2週間の間授業以外の時間を作って、グループで集まり、課題解決・課題実施に取り組ませる。第7と第8段階は教室で行うものである。

筆者が毎学期最初の3コマを使って、丁寧に授業の流れ、重要性、発表の仕方、活動の進め方などを説明する。その後、実際に上記の教育モデルを実施し始める。以下でアクティブ・ラーニング教育モデルを具体的に記述する。

1つ目の段階は「課題提示・課題把握」である。この段階では、教師が例えば「日本文化について言えば、何が思い浮かべるでしょうか」という質問を学生に投げしてみる。学生が自分で考えて、「寿司」や「着物」、「アニメ」、「空手」など様々なテーマを考え、話し合いや意見交換を行う。そして、この授業ではどのテーマを扱えば良いのか、みんなで選んだテーマとどのような関わりを持っているかなど話し合っ、思考力を身につける練習をさせる。この段階では、できる限り学生同士の議論を深めるように、教師は話す機会をあえて少なくしている。

2番目の段階である「テーマの議論や決定」では、教師は学生が自分で考えたテーマについてどのような知識を持っているかを聞き、それについて指摘をし、追加の情報を提供する。この段階では、学生が考えて、議論したテーマの中から六つのテーマをみんなで選ぶ。その後、3番目の段階である「グループ決定」に入る。学生の各グループは6人～10人からなる。日本語翻訳専攻に毎年、入学する学生の人数が増加してい

るため、たまにグループの人数を増やす場合もある。3番目の段階を行う目的は、学生がこれまでに慣れて来なかったチームワークの重要性を実感してもらうように導入したものである。また、チームワークによって、協調性も生まれると考えられるからである。グループの決定の段階では、先生がグループを決めるのではなく、学生にグループを決定するように指示している。しかし、毎学期同じようなモデルを扱う授業では、グループ決定の段階で、学生に前の学期とは必ず違うグループを作るように指示する。なぜなら、学生は大学に入って最初に参加したグループと常にチームワークをしたいという気持ちが強い傾向があるが、全ての学生の中に親密感が生まれるように、毎学期グループを変えるようにしている。

6つのグループが決まったら、自立性及び協調性を育てる目的で4番目の「役割分担」の段階に入る。この段階では、各グループが課題を実施する過程を想像してもらい、学生それぞれ得意なことを考えて、役割を分担する。この活動では、学生がチームワークのメリットを実感し、他人との協力でどんなに難しい課題であっても、成し遂げることの楽しさや、大切さを知る。また、自分が得意な分野や、同級生の得意な分野などを互いに知って、互いに学び合うことの重要性も実感するわけである。

5つ目の「準備」の段階は、想像力及び、責任感、規律などを学ぶ良い機会であると考えられる。つまり、役割分担の段階で学生が自分自身で決めたことを守り、自分のグループメンバーと協力し準備を進める。また、より良い成果が出せるように、みんなでいろいろ

ろなアイデアを出し合って、想像力を育てる段階でもある。そして、同じテーマについても自分の考えやアイデアと違う他人の考えを知り、物の見方や考え方も広がる練習だと思われる。また、限られた期間内で課題を実施し、一人一人自分の分担を守り、時間を守ることの大切さも実感でき、規律に繋がる段階だと考えられる。

その次に、6つ目の「リハーサル」の段階に入ることになる。この段階では、学生が本番に入る前に、みんなで集まって、発表のリハーサルを行う。筆者が研究者として日本に留学していたとき、学術学会に参加し発表を行うことが定期的にあったが、学会で発表する前は、必ず大学のゼミでリハーサルをして、先生方や同じゼミに参加している大学院生から指摘やコメントなどを受け、発表を改善する機会を設けた。このような経験を通して、課題や研究を発展できるのに、リハーサルがいかに重要なものなのか、実感できた。従って、大学生にもこのような経験が重要であると考え、学生同士で議論をし、みんなで行った作業や実施した課題の自己評価をし、改善できる場となる。「リハーサル」の段階で学生が本番に向けて、自分で考えた改善点を加え、課題を完成する。最後に本番である「発表」の段階になる。この段階では、学生が長時間に渡り、努力した成果を見出すことができる。発表の段階でも、役割分担を行わせ、グループ全員には必ず役割があることを強調する。発表の段階では、学生が大勢の人の前でどのようにして、自分の考えを分かりやすく説明することができるか、聞いている人が退屈せずに、面白く聞いてくれるにはどうすれば良いかを学

ぶ時間であり、自信が付くことも期待される。初めてこの経験をする学生は、最初の発表では緊張したり、人の前で話すのが苦手で、途中止まったりすることもあった。しかし、このような経験を重なることにより、学生が次第に慣れて、この作業を行う時間が最も楽しい時間となったことも多くの学生から聞かれた。さらに、コミュニケーション力も育つ時間であることが想像できる。

筆者は、毎回学生の発表が終了した時点で反省会を行う。第 8 段階である「振り返り・反省会」では、課題を総合的に評価する。つまり、発表者の学生グループ全員が自分で自分の発表を評価するわけである。その次に、発表を聞いていた学生が発表を評価する。最後に筆者である教師が発表者を評価するという流れで評価を行う。8 段階で行われる評価システムについて以下で具体的に説明する。

7.1 評価システム

・ 振り返りの流れ（反省会）

筆者は日本に滞在していたころ日本社会における反省会の文化に非常に感動した。しかし、母国では日本のように学校や大学、職場などで決まった形で反省会が行われることは珍しいものである。しかし、日本で反省会に定期的に参加していた経験から、やはり課題を解決し、自分の考えや行動を振り返ってみることは人格形成にも、学生の成長にも非常に大事なステップだということが分かった。また、自分の行動を振り返ることにより、今後の改善策を見つけることにも繋がるということが実感できた。従って、1年生の授業に

は反省会を導入することになった。授業で実施した反省会は、授業の全体的な評価にも繋がるような形で実施してみた。つまり、反省会を4種類の評価に分けてみた。自己評価や、相互評価、課題の実施に対する教師の評価、最後に授業に対する学生の評価の4種類を実施した。具体的に述べると、次のような流れで評価や反省会を行ってみた。

7.1.1 振り返りの流れ（反省会）評価の段階

- ①自己評価：学生が各グループの発表後に、自分の活動全体を振り返る。
- ②相互評価：学生が、発表グループを評価し、発表する。
- ③発表に対する教師評価：教師が、最後に全グループのよい点や改善点などを評価・指摘する。
- ④授業に対する学生評価：授業改善のため、学生は紙面によるアンケート調査に答え、場合によっては教師と個人面談を行う。

① 自己評価

自己評価の段階では、学生が各グループの発表後に、自分の活動全体を振り返る。つまり、発表者自身が自分の経験や、課題を達成する過程で身についたことや、戸惑ったこと、学んだことなど全ての学生の前で母語で話す。大勢の人の前で話す機会がほぼなかった高校新卒者として、有意義な機会だと考えられる。人の前で話すことを怖がる学生も、自分の意見や経験をどのように他人に伝えるか分からない学生も、自信が

付いて、他人の前で話す恐怖を無くすることができるようになる。

学習者がまだ、どのように自己評価を行うのか、他人の発表を聞いてどのように指摘すればいいのか、どのように相手から気持ちよく自分の意見を受け取るのかなど活動に入る前にきめ細かく、丁寧に3コマの授業を活用して指導するようにしている。

自己評価の課程は発表者自身のみのためになるものではなく、聞いている学生にも重要な情報であり、他人の経験を聞くことにより今後自分が発表者になったとき、どのようなことに注意すべきか、どのような方法で課題が実施できるか、また問題に直面した際にどのように対応すれば良いかということを知る機会となる。また、自分とは違う他人のものの見方や考え方を聞け、視野を広げるきっかけともなる。

② 相互評価：

相互評価の過程では、発表を聞いた学生が発表者へのコメントや感想、指摘などを行う。この段階では、学生が思考力を活性化して、どのようにして他人に自分の意見を気持ちよく受け取ることができるのかを学び、話し合いや意見交換の場となる。

③ 発表に対する教師評価：

教師が、最後に全グループのよい点や改善点などを評価及び指摘をする。教師は学習者が持っていない知識や経験などを持っているわけであり、最終的に評価を行うことによって、学習者に話す機会や考える機会を増やすことができると考えられる。要するに、学習

者が気づいていなかったことや、今後の課題などをより明確に指導して、学習者の努力を褒めるということも行う。

④ 授業に対する学生評価

教育の現場では教師は見本となることが非常に重要であり、学習者を評価するのみではなく、授業を改善できるように、学習者も授業を評価することが大事である。授業に対する学生の評価は紙面によるアンケート調査や、口頭での意見交換、場合によっては教師と個人面談などを行う。教師が学生から得た情報を活用し、今後の授業計画を改善できる重要な材料である。

8. アクティブ・ラーニング授業への学生の反応

実践的な教育モデルを導入した最初のころは学生の間で抵抗感があった。しかし、積極的に最初から楽しみ、頑張っていた学生もいた。例えば、授業実施し始めたころには以下のような声があった。

- 個人で活動する方が快適で楽だ。
- 先生に教えてもらう方がよく分かる。
- 初めての授業の流れに戸惑った。
- みんなの意見が1つにまとめることが難しい。
- グループのメンバーとは意見が一致しないので、他のグループに参加したい。

上記のような学生の意見があったにも関わらず、授業方法を諦めずに実践方法による教育の長点や優れたところについて丁寧に説明したり、学生が抱える問題や困難さに対する解決を提案したりしてみた。場合により、間接的な説得方法を通して、納得させようとし

ていた。例えば、「自分自身のメリットを分かるのに、アクティブ・ラーニングが重要であるとか、チャレンジしてみたらどうか」と言ったことを話した。しばらく経って、学生の反応が次第に変わり、以下のような変化が見られた。

- 自己主張が強く人の意見を聞くのが苦手だった学生は、積極的に他の学生と意見交換をしたり、異なる意見に耳を傾けたり、解決策を探る力を養うことが次第にできるようになってきた。
- 学生は、自分たちで目標を達成するために、他人と協力し、議論し合って知識を共有することの重要性を実感した。
- みんなで決めたことを尊重して、従う力を養うことができた。

このように、最初は抵抗感があったにも関わらず、時間が経つにつれ、学生がアクティブ・ラーニングの楽しさや重要性を認識できたと言える。さらに、学生が自分の能力を最大限に発揮し、アイデアを交換したり、想像力も伸ばして、課題を解決する姿勢が筆者の予想した以上に素晴らしかった。例えば、以下のような活動やアイデアがあった。

「茶道」という発表テーマでは、学生が茶道の道具を自分で作り、みんなに紹介したりした。また、日本語の「敬語」のグループ発表では、学生がストーリーを考えて漫画を作ったりした。漫画を通して尊敬語や謙譲語、丁寧な日本語とそうでない日本語の違いを紹介した。また、「着物」の発表グループは、実際に日

本の着物を来てきたり、「アニメ」の発表グループは様々な日本のアニメキャラクターの衣装を着て発表したりした。このように、学生が面白く学び、もの作りまでいろいろ素晴らしいアイデアがたくさん生まれたわけである。

8.1 日本文化になじませる実践活動や環境作り

卒業後日本企業で働く卒業生は少なくない。先輩は目標言語の能力の面でも、大学生活及び授業の流れの知識などの面でも後輩が持っていない何らかの知識を持っている。

先輩は後輩の立場に立って後輩に対して、親切にアドバイスや指導をするという役割があり、後輩は先輩を尊重し素直に先輩の助言や指示を受けるといった態度を示すことが必要である。

日本の文化に見られる上下関係は日本社会を特徴付けるものであり、学生にこれらの知識を教えることは必要不可欠だと考えられる。

例えば、職場における上司と部下の関係及び、学校や大学の中での先輩と後輩との関係などの人間関係がある。

日本語学習者も大学期間中にそれをうまく理解し、認識できるような環境作りも重要だと思われる。従って、日本語専門翻訳専攻では、これらの知識を与える方法として、まず先輩と後輩の関係を学生に無意識的に実感してもらうように活動を実施している。

例えば、先輩は後輩の立場に立って後輩に対して、親切にアドバイスや指導をするという役割があり、後輩

は先輩を尊重し素直に先輩の助言や指示を受けるという態度を示すことが必要である。

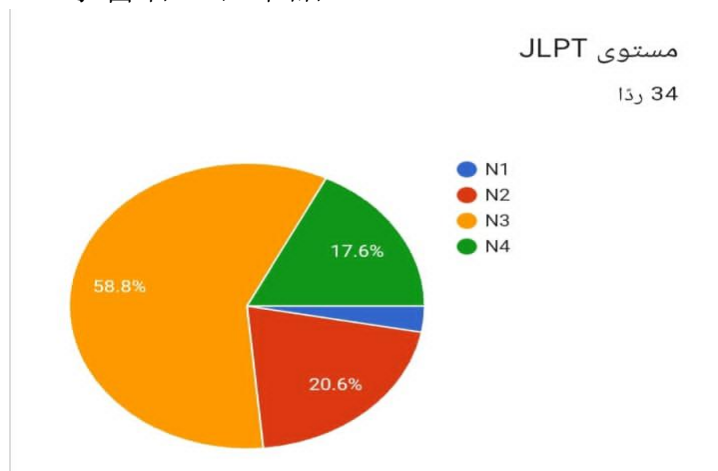
先輩にとっても後輩にとってもそれは新しい経験であるため、先輩が自分の意見を後輩に押し付けたり、後輩にも先輩に対して抵抗感が生まれないように、教師が常に間接的に両者にアドバイスや指導をすることが必要不可欠である。

筆者が担当する授業では、今年入学したばかりの1年生に対して、2年生の学生が授業の流れ、及び筆者が考えて作ったアクティブ・ラーニングのロールモデルを説明してもらうように指示している。しかし、その際に驚いたのは、一年間この授業を受けて来た生徒は自分自身でも同じことを考え、実際に後輩に自分の感想や、この授業を受けた最初のころが感じた抵抗感と実際にやってみて実感できた楽しさを伝えたいと思った。今は日々の大学生活で様々な場面やイベントなどにおいて学生は次第に先輩と後輩の関係や役割への認識が高まった。

9. 調査結果

本研究では、筆者が提案した教育モデルの成功率を客観的に図るためには、日本語専門翻訳専攻の日本語学習者 34 名を対象に選択式のアンケート調査を行った。被調査者の日本語能力のレベルは、以下の通りである。

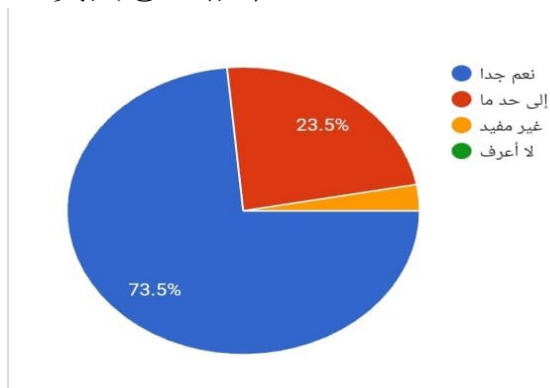
図 1. 学習者の日本語レベル



アンケート調査は、アラビア語で2つの質問項目を設定し、実施した。調査を行った理由は、筆者が実施した教育モデルの効果及び、学習者が将来教師にアクティブ・ラーニング型教育を継続してほしいかどうかを客観的に検証するためである。調査の質問①は「授業で経験したアクティブラーニングの教育モデルから、同級生と協力しお互いの経験から学び合うことができ、協調性や自立性を図り、積極的に授業に参加することができたと思いますか。」、質問②は、「今後将来大学では教師にアクティブ・ラーニングの教育モデルを実施して欲しいと思いますか」。

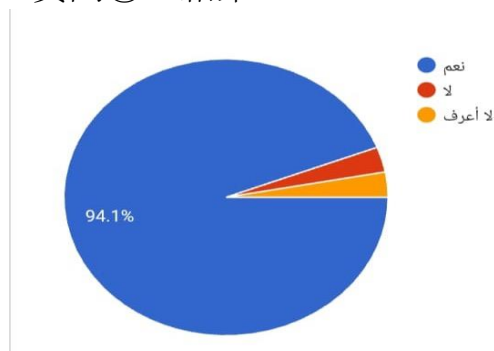
以下では、調査結果を表す図を提示する。

図 2. 質問①の結果



質問①の結果では、上記から分かるように、被調査者の7割が賛成していることが明らかとなった。つまり、授業で経験したアクティブラーニングの教育モデルから、同級生と協力しお互いの経験から学び合うことができ、協調性や自立性を図り、積極的に授業に参加することができたと言える。質問②の結果は以下の通りである。

図 3. 質問②の結果



質問②の結果から分かるように、被調査者の9割以上が、将来教師に同じようなアクティブ・ラーニングの教育モデルを実施して欲しいと選択している。このことから、筆者が提案した教育モデルが学習者のニーズを満たし、成功したと判断できると考えられる。

10. まとめと今後の課題

このように、アクティブ・ラーニングによる教室活動が学生にとって非常に重要なものであり、学生が自分自身のメリットを分かるのに効果的だと言える。しかし、本研究では中級レベルの日本語学習者の人数が初級レベルと比較的多いが、学習者の日本語のレベルが異なることにより、結果が異なるかを確認したい。つまり、入学したばかりの学習者である初級レベルでは、アクティブ・ラーニングをどのように受け入れるのかを今後調査を行い、違いを明らかにしたい。

また、筆者が提案した教育モデルをどのように持続可能な教育スタイルにできるか、継続できるように、どのような工夫が必要なのかを検討して、活動モデルをさらに工夫して、持続可能なモデルにしたい。また、評価システムの見直しも行いたい。

注

- アクティブ・ラーニングとは：教師が一方的に指導し、学習者が受け身になってしまう授業を行うのではなく、学習者自身で課題を考え、互いに話し合うグループディスカッションや、グループ活動を増やすことにより、学習者が授業により積極的に参加する授業を行うということである。
- 日本式教育：筆者が日本で体験したアクティブ・ラーニングを取り入れた教育方式のことを指す。
- 教師主導型：教師が一方的に話し続け生徒に教え、生徒は常に受け身型になっている授業のことを指す。

参考文献

- 安部英行 (2013) 『「学びのしかけ」を創る授業づくりネットワーク No.9「学びやすさ」を重視した説明・指示・発問の新しい一切授業』
- 伊藤崇達 (2017) 「アクティブ・ラーニング型授業における学習者の心理的变化—授業デザインの改善に伴う変化に焦点を当てて—」日本教育工学会論文誌 41 京都教育大学
- 井田剛史 (2018) 「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」『名古屋高等教育研究』18号 155-176.
- 溝上慎一 (2007) 「—アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」名古屋高等教育研究 第7号
- 森朋子 (2017) 「『わかったつもり』を『わかった』へ導く反転学習の学び」理論編」森朋子・溝上慎一編『アクティブラーニングとしての反転授業理論編』ナカニシヤ出版 19-35.
- 山地弘起 (2014) 「アクティブ・ラーニングの実質化に向けて—アクティブ・ラーニングとは何か—」長崎大学 JUCE 紀要 No1